

# 大船の 泊つる泊りの たゆたひに

## 物思ひ瘦せぬ 人の児ゆるゑに

弓削皇子 (巻二・一二三)

この歌は、「弓削皇子の紀皇女を思へる御歌四首」と題されたうちの4首目です。巻二の相聞(恋の歌)の部に収められています。

この2人はどのような関係だったのでしょうか。この歌の最後、「人の児ゆるゑに」の解釈が大きく二つに分れています。すなわち、「人妻なのに」「他の人のものなのに」と解して、道ならぬ片恋とする説と、「あの子のために」と解して紀皇女を指すという説です。物思ひをして瘦せ

やまと  
万葉がたり

ているくらいですから、恋の障壁があるのかもかもしれません。ただ、この歌群の1首目には「吉野川 逝く瀬の早み しましくも 淀むことなくありこせぬかも (吉野川は流れゆく瀬の水が速いので、しばらくも淀むことがない。未長く私たちもたゆとう心なくありたいものだ)」

(巻二・一一九)と詠まれています。「淀む」とは、恋人関係にありながら停滞する時の比喩としてよく用いられます。また「ありこせぬかも」も今の状態が続いてほしいと望む表現されています。人妻に対して用いられる「こせぬかも」と歌う

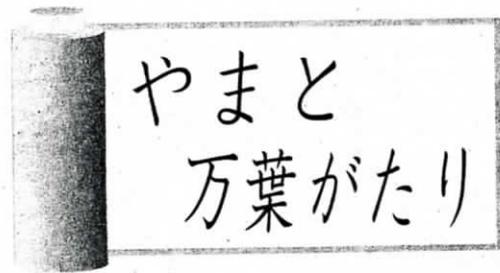
【訳】大船がやどる港の水のように心が揺れ動いては、あれこれと思いつづけて瘦せたことだ。あの子のために、可能性は低いといえませぬ。 今回の歌では、波のように揺れる物思ひをして瘦せてしまったよ、と恋人である紀皇女への思いの大きさを表現しているのではないのでしょうか。 弓削皇子の歌は『万葉集』に全8首あります。若くして亡くなった皇子ですが、落ち着いた味わい深い歌を残しています。 (県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

# ふさ手折り 多武の山霧 しげみかも

## 細川の瀬に 波の騒げる 柿本人麻呂歌集(巻九・一七〇四)

天武・持統天皇の時代に活躍した柿本人麻呂の歌集には、「皇子に献る」歌が複数収められています。今回の歌は天武天皇の第3皇子、舍人皇子に献った歌2首の1首目です。多武峰から出て飛鳥川と合流する細川の波音が詠まれています。わかりやすい歌のようでありながら、実は独特な歌です。

最初の「ふさ手折り」は枝や草をたくさんつかんで折り取る意味ですが、ここでは独自に枕詞として地名「多武」を導いています。また、霧がしげるという表現も他に見えませんが、漢字本文では「茂」の字で書かれており、通常、草木が茂る時に用います。これらの表現は、水源である多武峰が植物にも水にも恵まれ、



それが下流にも及ぶことを意図したものかもしれません。続く2首目には「冬ごもり 春べを恋ひて 植ゑし木の 実になる時を 片待つわれぞ (冬がおわって来る春の頃を恋しく思っ

て植えた木が、やがて実る時を半ば待つ私であるよ)」「(巻九・一七〇五)とあります。春に花が咲き、やがて実がなるように、皇子にも実りあることを願う、という意がこめられているとみられます。そういえば『古今和歌集』の序に仁徳天皇の治世を讃えた「難波津に 咲くやこの花」

【訳】いっばいに手折り枝もたわむ——多武の山霧がたちこめるからか、細川の瀬に波音が騒がしいことよ。

は山川草木を詠む、2

首1組の予祝の歌として皇子に献上したと考えられます。その後、舍人皇子(舍人親王)は最高位の一品となり、『日本書紀』の最終責任者として、また淳仁天皇の父として名を残しています。歌で願われたとおり、実りある人生だったのではないのでしょうか。 (県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳) 次回8月24日